

「下馬將軍」政治の性格

辻 達 也

I 寛文期幕府制度整備の評価について

4代將軍家綱時代の幕府政治について長い間通念化してきた概評を最もよく表現しているのは、『巖有院実紀』の末尾（巻60）に記してある次のような治世の評論であろう。

幼眇の御身にて御代うけつがせ給ひしかど、海内安寧無事にして、刑錯の治とも申べきほどの事なりしは、全く祖宗の盛徳、神威のいたすところといへども、其一には当時宗室執政の輩、みな祖宗の養畜し給ひし遺老、井伊掃部頭直孝・松平伊豆守信綱・阿部豊後守忠秋等の名臣にて、経国の大幹をしり、朝憲に精熟し、人心帰服せしかば、よく輔導の術を得たるゆへなるべし。（中略）ただおしむべきは、御稟受御虚弱にて、尊体御病がちにましましけるにより、政務みな権臣に委任ありて、多くはみづから聞召れざりける故に、寛文・延宝の頃にいたりては、弄権の輩すこぶる威福をはり、擁蔽の風おこり、下言通ずる事まれなり。いかにも寛仁恭儉の御徳ましましながら、慈恵左右にとどまり、徳政閭内を出ずとて、なげくものも少からざりしとぞ聞えし。

明治以降近年に至るまで、この時期の幕政に言及した論著は少なしとしないが、基礎的研究が前後の時期に較べて甚だ浅いといわざるを得ず、「下馬將軍」酒井忠清についても評論の域を出ていない憾みがある。このような研究の現状の中で、若干の基礎的事実の再検討をふまえて、示唆に富む新しい見解を打出したのは朝尾直弘である¹⁾。

朝尾の論文は「公儀」という語で表現される領主階級統合の公的権力の構造の変遷を、3代将軍家光時代を中心に論じたものである。そこで私がとくに注目するのは、朝尾が家光時代と家綱時代との比較に際し、従来はほとんどその差異を看過されてきた寛永12年（1635）と寛文3年（1663）の武家諸法度・諸士法度の相違点に着眼していることである²⁾。すなわち寛永の法度に見える「上意」「近習・物頭」の辞句が寛文の法度の条文から消え、代りに「奉行所」と「家」が強調されていると朝尾は指摘する。

その意味するところは、「家門・譜代」に依存してきた「公儀」権力の中枢に、家光時代に至って「近習・物頭」すなわち將軍直臣団を編入することによって、將軍「上意」による「公儀」掌握が可能となった。然るに幼將軍家綱の代になると「公儀」の最高の権威を体現する「第一人者」不在の状態があらわれ、ここにまた門閥譜代のまき返しによる「家門・譜代」重視の動向が生じた。「家」の重視は幕府の吏僚制においても門地・家格の重視となり、「奉行所」も「上意」を頂く「近習・物頭」が掌握してきたのに代って門閥譜代が支配するようになった。酒井忠清の路線はそのひとつの結着であったという。

門閥譜代のまき返しは幼將軍家綱の登場をまたず、家光時代の後半寛永19年（1643）頃からと私は考えるが³⁾、それはしばらくおき、諸法度をはじめとする寛文期に入ってから行政機構の整備は、単に寛永10年代に樹立された諸制度の最終的修飾にとどまるものではなく、朝尾の指摘するように、この時期の幕府政治の動向を考える上に大きな意味をもっている。

家綱時代の諸制度の整備は寛文3—4年（1663—64）を中心に、その前後にまとまって施行されている。その主要事項を列挙すると次の如くである。

（寛文2年 1662）

2月22日 若年寄を復活し、側衆久世広之・土屋数直をこれに任じ、旗本

を支配せしむ。

2月晦日 老中・若年寄の支配区分を成文化する。

(寛文3年 1663)

5月23日 武家諸法度発布。殉死の禁令を出す。

8月5日 諸士法度発布。

(寛文4年 1664)

3月29日 老中署判の制を改め、大事のみ連署し、小事は月番一人の署名とする。

4月―7月 諸大名に領地の朱印あるいは判物を頒賜する。

5月9日 小普請を留守居の支配とする。

此頃、評定所の寄合を、式日・立合・内寄合に区別する⁴⁾。

6月3日 禁中並公家諸法度が去る万治4年(1661)正月15日の皇居火災で焼失したので、その写しを作成し、家綱と関白二条光平連署して、これを京都に送る。

(寛文5年 1665)

3月18日 番方を主とする諸役人に役料を支給する。

7月11日 神社・寺院・僧侶の法度を発布。

8月―10月 寺社領朱印状1397通および諸門跡領朱印状を交付。

(寛文6年 1666)

7月21日 諸役人に役料を支給する。

このように寛文期の幕府当局は朝廷・寺社をはじめ大名・旗本あるいは幕府の諸組織等についての諸規則を数年の中に相次いで発布した。その幕府内外にわたる法令の総合的・網羅的な点も、まず前後に比をみぬものとして注目せねばならない。しかもこれらは幕初以来漸次発布してきた法令をここにただまとめたにとどまらない。例えば禁中並公家諸法度も、単に京都の法度原本が焼失したから江戸から写しを送ったにすぎぬというもの

ではあるまい。幕府が全大名にいわゆる寛文印知を交付して将軍との主従関係を再確認する作業をしている過程で、改めて将軍家綱と関白二条光平が署名した法度を京都へ送ったということは、幕藩体制下における朝廷のあり方を再確認する意味をもつものであろう⁵⁾。

寺社法度にしても、その主眼である各宗派の法式厳守・新義の禁止・本末秩序の維持は、すでに慶長から元和にかけて各宗派別に発布した法度の主眼でもあり、それらの共通項目をここに抽出してまとめたものとの感もうける。しかしこの法度の発布と寺社領朱印状交付と併行して、幕府は改めて日蓮宗不受不施派の弾圧を強化し、ついにこの宗派の寺院を檀那寺とすることを禁止してしまい⁶⁾、また寺社裁判を通じて、本寺・末寺関係の明確化、寺院内の上下秩序の確立を強く推進するという宗教行政の裏付けとして、この法度の制定は積極的な意味をもっているといえよう⁷⁾。

つまり幕府がこの時点で実施した全面的な制度上の再整備は、政治の新しい局面への展開の出発点をなすものと理解したい。酒井忠清による「下馬将軍」政治も、ここから発した幕政の流れの上に出現すると考えるべきであろう。

註

- 1 朝尾直弘「将軍政治の権力構造」(岩波講座『日本歴史』戦後第2版近世2 1975年12月)
- 2 寛文の法度は寛永12年(1635)の法度と比較してほとんど辞句を修正したにすぎないと見なされ(栗田元次『江戸時代』上 第4章第3節2「総合日本史大系」),その発布の意義は看過されて来た。
- 3 寛永15年11月土井利勝・酒井忠勝大老昇進が、松平信綱・堀田正盛・阿部忠秋等家光側近出身の閣老による幕政中枢掌握、門閥譜代層の後退を意味しているという解釈はほぼ定着したとみてよいであろう。朝尾が幼将軍家綱の時になって門閥譜代のまき返しが始まったとみるのも、右の解釈を前提としている。ただし寛永

15年以降の家光側近出身者と門閥譜代との関係について、私が先稿（「近習出頭人について」大類博士喜寿記念論文集）に「譜代の門閥は全く政局から遮断せられ」と述べたのは修正せねばならない。職掌からいっても、土井利勝・酒井忠勝は大老任命の際、朔望の出仕以外にも「大政の事あらばまうのぼり、老臣と会議」（大猷院実紀巻39）を命ぜられている。間もなく病気となった利勝はともかく、酒井忠勝が老中と共に將軍の面命を受けるという記事は実紀に散見する。藤野保はこれをもって家光側近と門閥譜代との融合と解釈している（「寛永期の幕府政治に関する考察」北島正元編『幕藩制国家成立期の研究』所載）。その融合の証拠として、藤野は利勝・忠勝に井伊直孝を加えた門閥譜代が松平信綱ら側近出身閣老としばしば「老臣會議」を開いている事実をあげている。私も「老臣會議」は寛永期の幕府政治考察の上に軽視しえぬと思う。しかし「老臣會議」は寛永期、とくに家光親政期を通じて断絶なかったであろうか。「大猷院実紀」に脱漏ないものとしてこれを追ってゆくと、寛永13年（1636）3月迄はかなり頻繁にその記事がある。13年について列挙すると次の如くである。

- （正月）25日 諸老臣と政事討議。
29日 土井利勝のもとに諸老臣會議。
30日 酒井忠勝亭に會議。
（2月）2日 阿部忠秋宅に會集。
7日 土井利勝のもとに會議。
8日 酒井忠勝亭に會議。
12日 松平信綱宅に會議。
22日 阿部忠秋宅に會集。
（3月）2日 堀田正盛がもとに會集。
22日 堀田正盛亭に會議。

然るに13年3月22日以後「老臣會議」の記事は実紀にあらわれない。僅かにこの年8月20日老臣評定所に会して津輕信義の家士の訴訟を聴断すとあり、ついで15年6月26日、島原の乱に関し、鍋島勝茂・榊原職直を評定所に召し、軍法違犯を諸老臣尋鞠すとあるが、これらはいずれも特定の事件についての裁断であり、大政を議する「老臣會議」とはやや性格が違うのではないかと考える。

やがて19年12月に至り、「老臣会議」は再び実紀の上にあらわれて来る。すなわち次の如くである。

(寛永19年 1642)

12月4日 紀伊頼宣・井伊直孝・酒井忠勝その他諸老臣禁中の事を会議す。(素
鷲宮=後光明天皇親王宣下)

(寛永20年 1643)

4月29日 井伊直孝はじめ諸老臣御前会議。

5月朔日 同じく御前会議、俄に尾州邸に諸老臣・紀伊・水戸両卿集って会議。

5月2日 諸老臣御前会議。ついで酒井忠勝邸に諸臣会集し、会津加藤明成の所
領没収を発表。

8月28日 尾紀水三卿・土井利勝・酒井忠勝等諸老臣、家光と密談数刻。(9月
朔日付禁裏諸役人宛黒印状の件か。)

この後、時には三家をも含めて、門閥譜代と家光側近系とから成る老臣会議の記事は、しばしば実紀に載っている。つまり「老臣会議」は寛永13年3月以降6年8カ月ほど断絶して、19年12月に復活したと見なしてよいと思う。

この「老臣会議」空白の6年余りの間の政治の動きをみると、家光の大病による政務からの離脱、島原の乱その他の混乱の克服、そうして土井利勝・酒井忠勝の大老への棚上げ、ついで松平信綱ら家光側近出身老中の幕府主要行政組織の掌握と進んで寛永15年を終る。ここ迄は側近系老臣による門閥譜代排除の過程であり、「老臣会議」断絶もその線上の事態といえよう。

然らば何故「老臣会議」が側近系老中実権掌握4年後に復活したか。私はそこに幕府行政中枢が背負うべき権威の変化を指摘したい。信綱ら側近系は將軍家光の個人的信任を背景に中枢へ進出した。そうして中枢を握ると次には表と奥の分離、つまり將軍の個人的恣意や新しい側近すなわち内廷勢力の外廷への介入を遮断しようとした。堀田正盛が家光病氣回復と同時に老中を辞し、將軍側近に入ったのも、表側の代表として奥向の抑制をはかるためであったと解釈している(拙稿「寛永期の幕府政治に関する若干の考察」横浜市大論叢24巻人文系2・3号)。こうして將軍の個人的権威が外廷への影響を薄くしていった代りに、行政中枢が背負おうとしたのが、しばしば三家を含む「老臣会議」の権威であった。恐らく

その契機は寛永末年の大飢饉による権力の危機にあったのであろう。なお、かかる「老臣会議」の復活は当然門地・家格の重視を背景としている。この傾向はすでに寛永18年2月「寛永諸家系図伝」編纂に着手したことにも伺いうる。

- 4 厳有院実紀（以下「実紀」と略）巻26には5月此月条に記載しているが、その典拠としている「武家厳制録補」は年月日必ずしも信頼しかねる。例えば実紀がこの評定所令に続けて、同じ出典で記載している諸番士当直の令は「御当家令条」（以下「令条」と略）巻24によると元和8年（1622）11月のものである。「令条」所載の法令では、延宝9年（1681）正月のものに、はじめて式日の他に立合の期日が見える（巻34）。ただし「徳川禁令考」後集巻1所載、享保4年（1719）12月評定所一座呈出「評定所始之事」に、寛文の頃より式日・立合・内寄合に分れたという評定所留役の伝承を記している。

- 5 朝尾が「禁中并公家諸法度の再確認がなされ」と記しているのも同じ解釈であろう。

- 6 辻善之助『日本仏教史』近世篇之三 第10章第11節参照。

- 7 「実紀」より寺社訴訟裁断を抽出すると次の如くである。

（寛文元年 1661）

- 3月 智積院能化・所化争論，所化僧処罰。

（寛文2年 1662）

- 8月 中山法華経寺を京都本法寺・頂妙寺・和泉妙国寺の三本寺に輪番管理させる。

（寛文3年 1663）

- 2月 伊勢専修寺と越前専修寺本末論争，伊勢を勝訴させる。

- 12月 高野山学侶行人訴訟裁決。

（寛文5年 1665）

- 3月 京都清水寺執行等追放。

（寛文7年 1667）

- 11月 備中吉備宮訴訟裁判。京都大徳寺真珠庵・酬恩庵本末裁断。

- 12月 京都本国寺住持・役僧争論裁決，役僧追放。

この後も、延宝年間を含めて寺社訴訟頻繁であるが省略する。なお辻善之助『日

II 行政機構における支配・監察の強化

寛文期の行政機構整備の結果、その運営上にあらわれて来る大きな特徴は、幕臣全般に対する行政機関の支配・監察の強化である。制度上からみても、若年寄の復活によって、諸役人の支配が老中と若年寄と二手に、明確に分けられ、さらに小普請が留守居の支配下に移り、支配関係の分掌化が行なわれたことは、それだけ幕臣への支配を綿密にし、監督強化を可能にしたといえよう。それに加えて番頭・物頭や大目付・目付、さらに巡見使に対してしばしば監察督励を命じている。例えば寛文3年(1663)8月13日家綱は大目付・目付を召し、今回發布の法度違反者をよく監察し、憚りなく言上すべき旨面命し、番頭・番士へも謹慎を専らとすべき旨戒諭した¹⁾。同5年2月25日にも家綱は若年寄侍座のもと、全目付に面命した²⁾。「実紀」には寛文4年頃から後、旗本等の処罰の記事は極めて頻繁に記載されているが、早い頃には喧嘩あるいは博奕など私的な非行によるものが多く、公的勤務にかかわる処罰は寛文6年頃から次第にその数を増している。その監督・処分の状況を、一般の幕臣と代官および領地支配に分けて記してみよう。

イ 一般幕臣の監督

(寛文7年 1667)

3月晦日 書院番・小姓組両番士に対し、城内勤務・將軍御供・休暇・病氣等についての規則21カ条を発令。

5月29日 小十人番士岩佐吉純、番頭三宅重正の遠郊へ健足を試みに誘うを拒否。重正怒って吉純の月俸に裏判せず、来宅に際しても無礼に扱うこと聞え、重正は閉門、吉純は牧野忠成へ召預けとなる³⁾。

6月29日 前日の儀式に高談失儀の者ありとて、目付がよく指揮すべき旨、奏者番・大目付へ令せらる⁵⁾。

(寛文8年 1668)

6月3日 殿中不法な輩を監察、言上すべき旨、家綱大目付・目付へ面命する⁶⁾。

(寛文9年 1669)

3月13日 諸番頭に対し、万治2年(1659)より寛文8年(1668)迄10年間の番士の勤怠の報告を命ずる⁷⁾。

閏10月18日 精勤(過去10年間欠勤12日迄)の番士・腰物奉行・納戸番・右筆401人を表彰⁸⁾。

11月14日 奈良奉行土屋利次、春日社造営についての命令を誤解し、門跡より抗議を受け、免職・閉門⁹⁾。

(寛文11年 1671)

9月朔日 大番頭水野忠増、己は諸番頭の上首なりとて、目付の指揮に従わぬため免職・閉門¹⁰⁾。

(延宝元年 1673)

2月4日 小姓組番頭奥勤内藤正勝・酒井忠良、奉職御意に应ぜずとて閉門に処せられる¹¹⁾。

4月6日 小細工奉行満井加右衛門・岩手三左衛門、奉職無状により追放、福田市兵衛は病死により家禄没収¹²⁾。

ロ 代官の督励

(寛文5年)

3月25日 豊後代官小川正久、その手代の不正に対する農民の訴訟の裁きよろしからずとて改易、手代2人は死罪、5人追放¹³⁾。

(寛文6年)

4月 代官へ支配所見廻・荒地等吟味・年貢・貸借・縁組等7条の訓令を

下す¹⁴⁾。

(寛文7年)

8月13日 代官近山安高・細田時徳、前年常陸谷原開墾(布川新田)の際、水利につき農民を困窮させたため訴えられ、安高は秋田盛季に、時徳は内藤信良に召預け¹⁵⁾。

11月12日 播州代官多羅尾光好、農民の隠田を検査せず、坪数・年貢不足せるにより、子光忠と共に閉門、手代3人は伊豆大島へ流罪¹⁶⁾。

(寛文8年)

8月6日 遠信代官宮崎道次病死するも、生前会計を怠るにより相続許されず。長子道常・次男道直は翌年9月隠岐へ流罪、3男・4男も松平直良へ召預け¹⁷⁾。

(寛文10年)

正月12日 当年関八州国廻り検使差遣につき、諸代官諸事入念、正路に、蔵入所務減少せざるよう訓令を発す¹⁸⁾。

(延宝4年)

5月19日 長崎代官末次平蔵、不正により、子供と共に隠岐へ流罪¹⁹⁾。

(延宝5年)

7月26日 年貢滞納により、代官福村長右衛門・佐野平兵衛は三宅島へ流罪、関口作左衛門とその子2人は切腹²⁰⁾。

ハ 領知支配の監督強化(領主の処罰)

(寛文5年)

7月29日 一柳直興(伊予西条2万5千石)、寛文元年女院御所普請助役に遅参し、また今回参勤におくれ、常々家中および領分の仕置悪く、且好色不法ありとて改易、前田綱紀召預け²¹⁾。

(寛文6年)

5月3日 京極高国(丹後宮津7万5千石)、一門と不和にて、父高広よ

り訴えられ、しかも家中の跡式を宛行わず、家中にうとまれ、未進の百姓に高利貸付け、未進の者を売り、領内を亡所にする等により改易、南部重信へ召預け、その子供達も配流²²⁾。

(寛文7年)

12月27日 小普請内藤忠成(500石)改易。知行所下総椿村名主庄左衛門、天領の名主も兼ねたるも、²³⁾評定所の裁きもまたず、不正ありとて誅するによる²³⁾。

(寛文8年)

2月27日 高力隆長(肥前島原3万千7石)、領地仕置悪く、非分の課役をかけ、農民困窮して、国廻り・浦廻り役人へ訴訟する。しかも家中の仕置も悪く、家士を苦しめるにより改易。仙台伊達家へ召預け。子供達も配流。翌28日、家綱諸大名に対し隆長の処罰を告げ、藩政に努むべきことを戒諭面命する²⁴⁾。

3月5日 小普請日下部宗芳(3,200石)、禄高に相応の家来を召置かず、小科の者を多数殺害し、知行所の仕置悪く、百姓を苦しめるにより、領地没収、追放²⁵⁾。

寄合福富平左衛門(2,500石)、累年知行所の仕置悪く、百姓に非分の課役をかけて困窮せしめ、家来を非道に召使うにより領地没収、追放²⁶⁾。

8月3日 奥平昌能(宇都宮11万石)、2万石減封、出羽山形へ移す。去る2月19日父忠昌死去の時、禁を犯して家臣殉死せるによる²⁷⁾。

(寛文11年)

10月朔日 国廻役人関東巡見の際、諸与力・同心の知行所の百姓困窮の所多き旨言上により、今後その頭々支配し、所務廉直に沙汰せしめ、もし衰弊せしむれば、領地を蔵米に替えるべき旨、各頭へ通達する²⁸⁾。

10月19日 寄合牧野正昌(3千石)、領知仕置悪く、農民困窮し、かつ分

限相応の人馬をおかず、親戚とも不和により改易²⁹⁾。

(寛文12年)

6月4日 大番山上吉勝(甲斐200石)、知行地の百姓年貢・課役の過重を徒党して訴う。幕府糺明するに吉勝非分なし。よって農民等追放に処するも、吉勝もその措置不行届とて、知行地を蔵米に替えられる³⁰⁾。

これらの事例から考えると、家綱の治世とくに寛文5—6年以降は、必ずしも実紀が「刑錯の治」と称えるような状態ではなかったといえよう。頭支配の監督・監査の強化は、一方で精勤者の表彰という形をとったとしても、番士以下の旗本・御家人に強い圧迫を感じしめたであろう。また大目付・目付等の監察機関の活動は代官・領主の支配に少なからぬ脅威となったと想像する。

この時期の幕府政治のこのような動向の背景には、幕府をふくめて全封建領主の支配の弛緩が指摘しうる。まず財政の不健全化がその顕著な現象である³¹⁾。さらに幕府に関していえば、直轄領行政の弛緩が当局者の重要問題として現われてきている。前述の寛文6年4月の代官への訓令をみると、永荒・川成・地不足を「吟味無之、百姓任申旨」、過分に郷帳へ仕上げる代官数多あるを第一条で戒めている³²⁾。ついで同10年正月12日付「関東御代官衆御触状³³⁾」には次の条文がある。

- 一 御代官方私欲雖無之、手代輩仕置悪敷におゐてハ越度に可相成候条、無油断遂吟味、急度可被申付事
- 一 近年御蔵入御所務令減少、百姓亦困窮いたしたる様に取沙汰有之間、向後諸事入念、百姓前田畠無高下様に遂僉儀、連々百姓身上つとり、御所務上り候様に仕置可被申付事

後年(正徳2年 1712)新井白石は勘定吟味役設置の頃の年貢収納状況について次のように記している³⁴⁾。

前代の御時に至て、諸国御料の乃貢年々に減じてわづかに二つ八分九厘

といふ事に至りぬ。御料の百姓等進する所のむかしにかはれりとも聞えねど、御代官の手代などいふものの私にせし所あるが故なるべし。

白石は前代すなわち5代将軍綱吉の時から幕府の年貢収納が減少の途をたどったとしているが、実は4代家綱時代の中頃には、すでにそれが当局の問題となっていたのである³⁵⁾。

寛文延宝期の幕府にとっての重要問題には、また百姓一揆が次第にその発生度数を増加させて来たことがある³⁶⁾。前述した代官や領主の処罰の中にも、領地農民との紛争、あるいは農民による告発が原因と考えられるものが少なくない。領地の所務、行政の適否の監察に、当局はかなり意を用いざるを得なかったことが察せられる。さらに延宝元年(1673)分地制限令を發布したことから窺えるように、農民の階層の変質もようやく当局の問題に上って来たのである。

このような社会の変動が政治面に影響しはじめた寛文6年(1666)には、春から秋へかけて全国的に風水害に見舞われた³⁷⁾。これを直接の契機として、幕府はその常設・臨時の支配・監察組織を全面的に活用して、行政機構の振粛に努めた。その結果が前に列挙した幾多の役人・領主処分となってあらわれたのである。しかもこれは幕府諸機関に緊張を求めたにとどまらず、広く諸大名に強い刺戟を与えているのである。

註

- 1 実紀巻26。 2 同巻30。
- 3 同 巻34。「令条」巻25 303号は11月付とするも、今は実紀に従う。
- 4 同 巻34。 5 同 前。 6 同 巻36。
- 7 同 巻38。 8 同 巻39。 9 同 前。
- 10 同 巻43。寛政重修諸家譜(以下「重修譜」と略)巻330・331。
- 11 同 巻46。 12 同 前。
- 13 同 巻30。重修譜巻864。

- 14 御触書寛保集成（以下「触書集成」と略）23 1311号。
- 15 実紀巻35。重修譜巻182・942。
- 16 同 巻35。同譜巻946。
- 17 同 巻37・39。同譜巻1053。
- 18 武家厳制録巻21 229号「関東御代官衆御触状」。
- 19 実紀巻52。
- 20 同 巻55。重修譜巻133（福村）・854（佐野）。
- 21 同 巻31。同譜巻603。令条巻35 539号。
- 22 同 巻32。同譜巻420。令条巻35 540号。
- 23 同 巻35。同譜巻810。
- 24 同 巻36。同譜巻511。令条巻35 546号。
- 25 同 巻36。同譜巻670。令条巻35 547号。
- 26 同 巻36。同譜巻593。令条同前号。
- 27 同 巻37。同譜巻546。令条巻35 548号。
- 28 触書集成23 1297号。
- 29 実紀巻43。重修譜巻366。（右譜には牧野成長とある。）
- 30 同 巻44。同譜巻855。
- 31 寛文延宝期の幕府財政について具体的にはつかめないが、例えば荻生徂来「政談」巻2に、勘定頭伊丹播磨守がひそかに懇意の者に対し「公儀ノ御使用、入ルヲ量テ出ルヲ校レバ、早出ル方多ク成テ、御藏ノ金ヲ毎年1—2万両程ヅゝ足ス也。」と語ったということを父方庵から聞いたと記してある。その伊丹播磨守とは恐らく慶安3年（1650）から寛文2年（1662）迄勘定頭を勤めた伊丹勝長であろう。幕府が延宝4年（1676）天守金蔵の金分銅20箇の中7個をもって小判5万7千800両余を鑄造し、翌5年には銀分銅206箇の中40個を鑄潰して銀貨1758貫余をつくったことも「政談」の記事の裏付けとなろう。（栗田元次『江戸時代』上第4章第7節3 総合日本史大系）

諸大名の財政窮乏もほぼ同様に表面化している。例えば寛文7年には館林（綱吉）家が7万両、同8年には尾紀両家が各10万両、老中板倉重矩が2万両、延宝3年には甲府（綱重）家・館林家が各3万5千両、同6年にも両家が各5万俵幕

府から拝借している（実紀）。仙台藩においても寛文年間から商人への支払が滞り、延宝6年には借金が元利合計24万5千両余に達した（伊達家文書4 柴田朝成覚書、同文書5 柴田宗意外4名連署起請文）。その他この頃から債務返済の滞った大名が少なくない。（例えば松本四郎「寛文一元禄期における大名貸しの特質」三井文庫論叢 創刊号 参照）

32 触書集成23 1311号。

寛文7年播州代官多羅尾光好処罰理由はこれに該当するであろう。

33 武家敵制録巻21 229号。

34 折たく柴の記巻中。

35 寛文8年8月没後会計不正発覚して処罰された代官宮崎道次の支配していた遠州豊田郡阿多古領・川合村・熊村においては、承応元年（1652）から寛文4年（1664）にかけて、連年のように年貢が本途に対し1割乃至数割下げられている（佐藤孝之「近世幕領における永高制」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和52年度所載）。この年貢割引が何故実施されたのか、またこれが宮崎氏の会計不正といかに関係するのか、なお検討を要するが、「所務令減少」の一実例である。

36 青木虹二『百姓一揆総合年表』所載「年次別一揆件数」によると、寛文一延宝期20年間に193件あり、年平均9.7件となる。これは元禄以降に較べれば少いが、正保一万治期17年間82件、平均4.8件に対して倍増している。

37 「実紀」巻32・33には次のように記載されている。

3月 伊予・土佐・伊勢洪水（7月19日条）

4月 常陸永雨（7月8日条）

5月 武蔵・常陸大風雨洪水（5月2日・7月8日条）

6月 常陸大風雨・雷雨洪水（7月8日条）

7月 豊後・尾張・美濃大風雨洪水（8月10日条）

淀・大和・木津3川堤防築造（8月21日条）

武蔵・相模・駿河・河・伊勢・美濃・近江洪水地巡察（9月15日三条）

Ⅲ 寛文8年の儉約令

寛文8年(1668)2月には江戸に大火が頻発した¹⁾。2月15日將軍家綱は式日に登城して来た諸大名・旗本に対し、今度の火事につき、諸事急度軽くし、家中在々を困窮せしめざるよう面命した²⁾。これから3月末にかけて広汎かつ頻繁に儉約令が発せられた。すなわち次の如くである。

(2月)

15日 老中將軍の命を承け、諸番頭に対し、儉約厳守を配下の番士に諭告させる³⁾。

19日 家綱大目付・目付に面命する(恐らく儉約のことか)。また老中納戸頭に対し、幕府納戸方の冗費節減を命ずる⁴⁾。

20日 番士に平常紬の小袖、木綿の袴着用を許し、諸隊同心は当番の日本綿を着し、羽織は着るにおよばずと令す⁵⁾。また3月朔日より番士一組3分の1づつ、1年間休暇を取らせる⁶⁾。

22日 江戸町中蒔絵師に対し、梨地道具を作ることを禁止する⁷⁾。

24日 1反銀300目以上の小袖表を禁じ、もし呉服屋等より預かる者はこれを返させ、呉服屋等に売残る品は番所へ持参させる⁸⁾。

28日 徒・若党の衣服、紗綾・縮緬・綸子等を禁ずる。また直参の者粗服着用を令せられるにより、諸藩士は殊更質素にすべき旨命ずる⁹⁾。

(3月)

朔日 諸大名の留守居を召集し、公儀への献上品を除き、祝儀の際の贈答、家臣への下賜、柳樽贈答等の廃止・軽減を命ずる¹⁰⁾。

3日 老中家来衣服絹紬以外禁止せるにつき、旗本召仕の者も衣服儉約を命ずる¹¹⁾。

各地高札の用材に雑木を使用させる¹²⁾。

諸役人寄合等の食事、勤番の際の弁当の品数を制限する¹³⁾。

屋敷長屋石垣・塀・腰板等を質素にさせる¹⁴⁾。

7日 類焼せる旗本の家再建に際し、長押作・杉戸・付書院・彫物・塗床縁・樺門等を禁ずる¹⁵⁾。

大目付より諸大名に対し、直参に准じ、家臣の衣服を質素ならしむるよう命ずる¹⁶⁾。

13日 三奉行配下に儉約を厳諭せしめる¹⁷⁾。

14日 農民に対し、家作・衣服・食物・祝儀・葬祭等儉約を守るよう令す¹⁸⁾。(農民への令の内容は従来のもの繰返しに近い。)

15日 町人はたとい扶持人たりとも帯刀して江戸中徘徊するを禁ずる¹⁹⁾。

また町人に家作・衣類の儉約を命じ、蒔絵・梨子地・切金道具の製造を禁ずる²⁰⁾。

20日 町人の屋作を軽少にし、長押・杉戸・付書院・彫物・組物等を停止し、嫁娶・衣類・振舞・葬祭等儉約を命ずる²¹⁾。

堺町・木挽町みせ物の結構美麗を禁じ、役者の衣裳、人形の装束を制限し、新吉原の屋作等は江戸町中の法式に応じて軽減せしめ、衣類も絹紬木綿を着用せしめる²²⁾。

江戸町中の棟梁・請負人に対し、大名・旗本・寺社より三間梁以上の大建築を誂うるとも請負うべからざる旨命ずる²³⁾。

25日 寺院の造作に梁行京間三間以内等の制限を指令する²⁴⁾。

28日 禁裏付役人に対し、禁中の衣服・諸道具・酒宴等の節約、公家の遠所出行の制限等を指令する²⁵⁾。

幕府の儉約令は江戸時代を通じて間断なく発せられていたといって過言でないが、このように上は朝廷から諸大名・旗本・御家人・諸藩士およびその奉公人・町人・百姓あるいは寺社・芝居・吉原と、社会の全階層にわたって詳細に規制を加えた儉約令は、前後に比をみないものである²⁶⁾。さらにこの儉約令が広く多数の藩に大きく影響していることにも注目せねば

ならない。その状況を次に記してみよう。

（岡山藩）

池田光政はこの年5月7日帰国、翌8日家老・番頭・物頭等を集め、火事ニ付、御直ニもけんやくの事被仰付、其以後も度々被仰出候事共在之、就其、上之御心ニ叶候様ニと存候間、法仕改事可在之、左様ニ心得可申。

と申渡した²⁷⁾。ついで6月朔日光政は家中を西丸広間に集め、次のような諭告をした。

此度申出制法、当春公方様御直に被仰出上意を本として申出候間、左様に可相心得候。只今迄の様におろそかに心得、法を背者於有之は急度可申付候。（中略）当春上意を承候得は、只今之時に当て、奉对上候御奉公は、國中末々迄儉約を堅申付、國中飢寒之者無之様に仕候程忠は無之と存候。然共、此段我等一身之志斗にては不成事に候。是偏に家中侍共覚悟に依て、奉对上候御奉公申上候義者、我等に対して無比類忠節と可存候間、自今以後は何も左様に心得、随分堅可相勤事。

そうして光政自身の衣裳をはじめ、夫人の衣裳・膳部、家中の女着類・家作・武具・諸道具・振舞・祝言・衣類・土産銭別・喪礼について、こまかい制限令を発した²⁸⁾。

同日、村代官・忍之者・大船頭・歩行・鷹匠・料理人等下級の家士に対しても、衣服・振舞・家作等についての制限令を発し、百姓に対しても衣服・祭礼・葬礼について儉約を命じた²⁹⁾。

（鳥取藩）

3月朔日幕府から指令を受けると直ちに家中の武士とその召使いの衣類音信などについての法度を下したが、藩主池田光仲帰国後、6月11日に屋作・武具・振舞・湯治・衣類・音信・祝儀・仏事にわたって儉約令を発布すると共に、岡山藩とほとんど同文の諭告を読聞かせた。これは池田光政

と相談しての措置であったという³⁰⁾。

ついで6月19日には、公儀よりの条々堅く守るべしとて、町人に対しては帯刀・屋作・衣服・道具製造・祝言・音信・振舞・盆踊りについての制限令を発し、百姓に対しては衣服・音信・諸勸進・祝言・葬祭についての法度を下した³¹⁾。

(加賀藩)

3月朔日大目付より留守居戸田与市郎が申渡しを受け、翌日これを金沢へ伝達した³²⁾。在江戸の諸士に対しては朔日付をもって衣服に関する制限令を発したが、7月6日に至って、家中侍分・足輕・小者・中間・女中の衣服、家中の振舞、百姓の振舞・音信・家作・衣類・食物、町人の衣類・振舞・家作・葬礼・嫁娶、寺院の建築(これは幕令通り)など広汎にわたる儉約令を発し、さらに8月14日には百姓新調の衣服の紋型染を禁じた³³⁾。

(福岡藩)

4月朔日大目付伊藤小兵衛・毛利長兵衛連名で、家中侍寄合料理・家作・衣服・刀の長さ・馬具・髪型・音信・宇治茶喫飲など13条の禁令と、嫁娶の儀式に関する10条の儉約令を発し、24日には江戸参府の武士へ衣類制限令5条を下した³⁴⁾。

これらは幕令をうけて諸藩が独自の儉約令を発したところであるが、熊本³⁵⁾・中津³⁶⁾・長州³⁷⁾・広島³⁸⁾(三次)・津³⁹⁾・秋田藩⁴⁰⁾などは幕令をそのまま伝達している。儉約令は陳腐常套の感を免れない問題であるから、恐らく地方史などで看過された所もあると考えられ、この年の儉約令の諸藩への影響はより広がったと想像し得る。幕令に対し諸藩がこのように反応を示していることは、寛文期の幕府政治の要点として注視せねばならない。

この儉約令は2月初めの江戸大火を契機として発せられたのであるが、寛文8年は寛文延宝期の幕政の特徴を示す諸政策が集中的に施行された年

であった。まず領主・諸役人の処分について、前に列挙したように、この年肥前島原城主高力隆長・寄合福富平左衛門・日下部宗芳・下野宇都宮城主奥平昌能・遠信代官宮崎道次が処分されている。「刑錯の治」とはいえぬにしても前後の時代に比して改易・減封件数の少い家綱の治世においては、この年は領主処分の集中した年である。殉死の禁にふれた奥平氏を除いて、いずれも支配地行政の失敗による処分であり、前三者は恐らくその前年の諸国巡見使の監察に基くもので、領地農民の抵抗・告発の結果と考えられる。また代官宮崎道次の場合は、父祖以来の旧領に根拠を置く土豪年貢請負人型代官が、年貢会計精算不能により失脚、処罰されるという綱吉時代の代官処分⁴¹⁾の前駆である。

次に、町人の帯刀制限を強化し、武士と町人の身分差別の明確化をはかったことに注目せねばならない。従来も町人の帯刀についての法令はあったが、それは町人一般に対する令ではなく、「かぶき者」の長刀禁止令であった⁴²⁾。然るに寛文8年3月の町人に対する儉約令では「町人刀帶之、江戸中徘徊之儀、堅可為無用」と町人の帯刀を禁止し、免許の者を呉服所・金銀座・本阿弥・狩野・大久保主水など特定の御用商人・職人に限定した⁴³⁾。ついで5月朔日には能役者に対しても、観世・宝生・金剛・金春・喜多諸座の頭父子その他若干名を指定して帯刀を免許した⁴⁴⁾。8月には江戸の町に対し、春に申渡した儉約の励行を命ずる触を出したが、その附りとして、「表店ニ罷在候むさとしたる者とも、上下むさと着し申間敷候事」と令し⁴⁵⁾、表店をかまえるほどの富裕な町人といえども、みだりに武士をまねて袴を着用することを禁じている。つまりこの儉約令には、経済的に向上する町人層への政治的対策を含んでいるのである。この方針は諸大名にも影響が認められる⁴⁶⁾。

商品経済に関する新しい施策のあったことも見逃せない。前に述べたようにこの年2月24日には江戸中の呉服屋等に対し、1反銀300目以上の小

袖表の在庫品を番所へ持参するよう命じたが⁴⁷⁾、ついで27日には町中の諸問屋・諸商人に対し、次の15品目の在庫量を自分の蔵、借蔵ともに申告せしめた。

米・大豆・菜種・大麦・油・鯨油・塩・小麦・小豆・荳・薪・酒・炭・
胡麻・魚油

これらの売却は勝手であるが、その場合には買手から証拠を取り、また今後入荷の分は町々名主・五人組立合って員数を改めて証文を発行し、新入荷分は別置せよと命じている⁴⁸⁾。これらはいずれも日常生活必需品であって、直接にはこの月初めの大火による物価騰貴抑制を目的としたものといえるが、都市消費生活物資の価格問題は近世後半期を通じて幕政上の重要課題となる。幕府はすでに寛文8年にこれを問題として取上げているのである。また4月には諸国に対し、其所で古来産出の諸色または他所より移入の商品について、津留を施行している所があれば報告せしめている⁴⁹⁾。これも恐らく江戸大火後の物資供給という当面の目的から出たものであろうが、全国の商品流通への幕府の関心が窺いうる。

さらにこの年から天和3年(1683)迄16年間、幕府は合計197万貫文という多量の寛永通宝(通称文銭)を鑄造した⁵⁰⁾。元文元年(1736)以前すなわち近世前半期においては群を抜く大量の鑄銭であり⁵¹⁾、その貨幣経済におよぼした影響は多大であったと考える。

要するに直接には寛文8年の江戸大火、あるいは遡ってその2年前の全国的風水害が契機となったのであろうが、これ迄列举してきた諸政策は、この頃から露呈しはじめた全領主支配の弛緩に対し、幕府が整備を完了した行政組織の機能を広く活動させて取組もうとした結果である。

それは儉約令を中心としてとくに寛文8年に集中した。その儉約令に諸藩が敏感に反応したのは、単にそれが將軍家綱の面命であったからではなく、財政難や農民の反抗等、支配上の弱点を次第にかくしきれなくなっ

きた諸藩にとって、強化された監察機能をはじめとする幕府の姿勢が少なからぬ脅威と圧迫を覚えさせたからであると解釈したい。私はここに寛文期の幕政の大きな特色を認めるのである。

註

1 朔日、酒井忠音牛込下屋敷より失火、番町・糀町・市谷におよび、また元吉祥寺前から出火、神田台・石町・本町・通町・日本橋におよび、夜また糀町焼く。焼失家屋、侍屋敷2407軒、寺136軒、町屋132町、百姓家170軒。

4日、上野車坂下長慶寺より失火、下谷・浅草・鳥越・本所・深川におよぶ。また四谷伊賀町より出火、青山・赤坂におよび、さらに麻布より失火、三田・芝に延焼する。

6日、午後小日向より失火、小石川・牛込・台所町・田安・代官町・雉子橋辺の武家屋敷全焼、本丸大奥も類焼。(実紀巻36、令条巻27 344号)

2 令条巻27 344号、実紀巻36。

3 実紀巻36。 4 同 前。 5 同 前。

6 徳川禁令考巻20、実紀巻36。

7 正宝事録 430号。 8 同 431・432号。

9 実紀巻36。

10 加賀能登郷土図書叢刊「自他群書」巻2、触書集成19 1056号、令条巻29 389号、実紀巻36、毛利十一代史巻13（但、「実紀」は2月此月、「触書集成」は2月、「令条」は3月）

11 実紀巻36、令条巻25 304号。

12 実紀巻36、触書集成24 1333号。

13 同 巻36、令条巻25 305号（「実紀」は3月20条）。

14 同 巻36、令条同前号、触書集成29 1642号（但、「実紀」は2月此月、「触書集成」は2月。）

15 実紀巻36、令条巻29 389号、触書集成29 1643号。

16 同 巻36。 17 同 前。

18 同 巻36、令条巻23 286号、触書集成24 1334号。

- 19 同 卷36, 令条卷31 423号, 武家厳制録卷30 327号, 正宝事録435・438号。
(令条は20日付の儉約令の条文に載せる。正宝事録によるに発令は両度ある。)なお令条にはとくに帯刀免許の御用商人・職人の名を載せている。
- 20 実紀卷36, 武家厳制録卷30 327号, 正宝事録 435・438号。
- 21 触書集成19 1057号, 令条卷31 422号, 正宝事録 436号, 実紀卷36。(「触書集成」には京都・大坂・奈良・堺・伏見・長崎・駿府・山田へも通達とある。)
- 22 触書集成46 2695・2696号, 令条卷31 422号, 武家厳制録卷30 329号, 正宝事録 439号。
- 23 正宝事録 437号。
- 24 実紀卷36。(触書集成21 1177号, 令条卷12 137号, 武家厳制録卷30 323号には2月とあり。)
- 25 実紀卷36, 武家厳制録卷1 9号。
- 26 この年の儉約令について言及している歴史書は極めて少い。「実紀附録」に、家綱の代になって幕府初の儉約令を下したとあるが、「当代御系統のはじめ」と記しているので、果して寛文年8の令を意味しているのか否か明らかでない。内藤耻叟『徳川十五代史』(明治26年)に法令を列举してあるが、その後三上参次・栗田元次等の著書にも触れられてない。僅かに尾藤正英が小学館版『日本の歴史』19(昭和50年)に数行にわたって言及し、新しい現象と評しているのみである。恐らく儉約令は陳腐な現象として多くの研究者が看過してきたのであろう。
- 27 池田光政日記
- 鳥取藩の場合も同様であるが、この儉約令が將軍家綱の直命として重視されているところに注目する必要がある。家綱時代、將軍は幕政にほとんど関与することがなかったというのが通説であるが、この儉約令をふくめて、実紀には家綱の直命の記事がしばしば載っている。政策決定の場に家綱がどれほどかわっていたかは明らかでないが、指令についてはかなりの権威が認められていたことは、岡山・鳥取両藩の態度から窺知することができる。この時の將軍家綱は朝尾直弘のいう「公儀の最高の権威を体現する第一人者」(朝尾「將軍政治の権力構造」)の立場にあったと認めてよかろう。

28 有斐録 亨。

- 29 『藩法集』岡山藩上所载「法例集」巻7 976・1016号, 巻11 1553号, 巻7 975・1015号。
- 30 『藩法集』鳥取藩「御家中法度」一57・58号, 「因府年表」(鳥取県史7所載)
「因府年表」の編者岡嶋正義は, 光政との相談が因州・備州の藩中音信贈答停止の事のみかと推定しているが, 藩主諭告がほとんど同文なので, 恐らく全般にわたって両藩密接な連絡があったのであろう。
- 31 『藩法集』鳥取藩「町方御法度」一 25号, 「在方御法度」一 69号。
- 32 「自他群書」巻2 (加賀能登郷土図書叢刊)
- 33 加賀藩史料第4編。
- 34 「福岡藩主記録」(福岡県史料4)。
- 35 寛文8年3月「従公儀被仰出候御書附之写」(『熊本県史料』近世篇3「部分御旧記法度部」在中御法度之事)
- 36 寛文8年12月「今度従公儀御書出之写覚」(『大分県史料』17「中津藩在中御条目并御書付」)
- 37 毛利十一代史
この時の幕府儉約令をすべて3月朔日にまとめて載せている。或は編者が「実紀」「徳川十五代史」から採録したものとも考えられる。その場合は幕府儉約令に対する長州藩の反応の史料とはなし得ないであろう。
- 38 寛文8年3月「村方諸事儉約を申付ける触書(三次支藩)」(『広島県史』近世資料篇「鳳源君御伝記」6)。
- 39 寛文8年3月「百姓風俗取締覚」(『天理市史』上 歴史〔近世〕所引 上野市立図書館蔵 西島八兵衛「万大控」)
『天理市史』によると, この儉約令は永く藤堂藩の風俗取締りの基本法となったという。(現天理市域はもと伊勢津藤堂藩の領地であった。)
- 40 寛文8年5月3日「公儀被仰渡」7号(『新秋田叢書』12), 同日「江戸御書付之写」(『第二期新秋田叢書』3 上肴町記録1 37号)「5月5日於御広間被仰出個条」(『新秋田叢書』1「羽陰史略」巻2)
- 41 拙稿「天和の治について」(史学雑誌69—11), 『享保改革の研究』第2章5 参照。

代官宮崎氏は、道次の祖父泰景の代迄信州伊奈郡座光寺村に住し、武田氏に仕えたが、武田氏滅亡後没落。天正16年（1588）家康により旧領復活。その後一族信州遠州の代官を勤めたが、いずれも寛文―元禄の間に免職または他の役職に転じている。

42 例えば「正宝事録」3号正保5年（慶安元年 1648）2月22日町中連判「御請負申事」に、「町人長刀并大脇差を指、奉公人之真似を仕、かふきたる躰をいたし、かさつ成儀并不作法成者有之に付ては、御目付衆御廻り、見合次第御捕、曲事に被仰付候間、向後奉公人之まねを仕、刀を指申間敷候」とあるのは、武士と町人との身分差別令ではなく、当時旗本奴に対抗して横行した町奴の禁令と解すべきである。（なお同25号参照。）因にこの頃は町人のみならず、武士のかぶき者取締りも強化された時期であった。

43 正宝事録435・438号、令条卷31 423号、武家厳制録卷30 327号。

44 殿中日記、実紀卷36。

45 触書集成19 1058号。

46 鳥取藩では6月19日の町人への儉約令第2条に「扶持人之町人、只今迄刀指来候者之外可為無用（中略）惣て常に武士之作法にせ申しき事」と令している（町方御法度一 25号）。金沢藩でも7月6日の町人への儉約令第2条の附りとして「刀をたいし、はいくはい無用之事」と令している（『加賀藩史料』第4編所引「国事雑鈔」）。

47 正宝事録 431・432号。

48 触書集成36 2048号、正宝事録 433号、実紀卷36。

49 同 25 1381号。 50 折たく柴の記巻下、三貨図彙卷4。

51 拙著『享保改革の研究』第7章4参照。

IV 酒井忠清の立場

寛文期の幕政において、大老酒井忠清が「下馬將軍」の異名を受けるほどの権勢をにぎったことについては、幾多の解釈が述べられているが¹⁾、その権勢の根柢の一は忠清の家系に基いている。すなわち忠清の家はいわ

ゆる雅楽助流酒井の嫡流であって、伝えによれば徳川氏との関係は甚だ古く、歴代その老職の地位にあり、門閥譜代の最高ともいべき家であった²⁾。

忠清は承応2年(1653)30歳の若年で、他の役職を経ることもなく、前代の遺老松平信綱・阿部忠秋をさしおいて老中上首の地位についた。やがて寛文2年(1662)には松平信綱・酒井忠勝が死去した。ついで同5年8月5日には阿部忠秋が、老衰の上多病という理由で、月番・評定所出座を免ぜられた⁴⁾。その翌6年3月29日忠清は忠秋と共に、通常の奉書連署を免ぜられた。これが忠清の大老職就任である⁵⁾。忠秋と共にとはいっても、忠秋が幕政の中樞からの隠退であったのに対し、忠清は閑老を一段ぬきんでた地位をいっそう明確化したのである。

忠清がこの地位を得たのは、まずはその家格によるものと見るべく、それに加えて前代の遺老の相次ぐ死去、隠退がこれを固め上げたといつてよからう。しかしこれだけならば、それは幕閣内部の勢力関係の変化ともいい得よう。然るに「下馬將軍」という異名には、忠清の握った権勢に対する幕閣の外からの畏怖や批判が伴っているように見受けれる。例えば池田光政の「酒井雅楽殿へ御建白の御草稿⁶⁾」に、「御老中之内、貴様御一人の御覚悟にて、残候衆へもうつり可申候。天下の安否、只今の時節、貴様御一人のやうに奉存候」と忠清の強大な実権を指摘し、「諸大名共勝手能候へば悪き心出来候物にて候、すりきり申様に御仕置候由、御老中の御心様に御座候旨申ならはし候。いかばかり左様には御ざ有まじく候へ共、若左様事申者御座候ては、御心ひかれ候へばと存、申上候。」と忠清の対大名政策に警戒の念を表明すると共に、「勝手不相成故、下民せめ付、家中下民共に困窮仕候様に候はゞ、やる方なくあらぬ心もいでき申物と申つたへ候。」「只無心元存候は、諸国こんきう故、一揆第一と存候。とても、うへ死可仕よりはと存、方々に一揆おこり申候はば、左様之時節は大名共之

内に逆心の者も出来可申と存候」と警告している。この建白書の立場は、領主の支配・財政の安定こそ天下の安定の基礎とし、当時の幕政の方向が、権力を独占する酒井忠清により、領主の支配や財政の不安定化に乗じてこれを圧迫する傾向にあることを批判しているのである。

当時の幕政に対し諸大名が畏怖・警戒の念を懐いていたことは、次の事実からも窺いうる。すなわち榊原家に「御当家紀年録」（別名「秋月記」）という史書が秘蔵せられている。これは寛文4年（1664）榊原忠次が編纂させたもので、徳川（松平）氏発祥より慶安4年（1651）家光の死に至る徳川家の編年史で、類書中早期のものであるが、とくに榊原家に伝わる秘事などが記されているとは認め難い。これに寛文10年11月3日付の家老以下重役連署の「添巻物」があり、それに次のような文章がある。

寛文拾年戌八月、柴田六左衛門江戸在番之節、弘文院（林鶯峯）御屋敷へ御見廻候て、六左衛門ニ隱密ニ御物語被成候ハ、従公儀先年被仰付候本朝通鑑此比出来候而指上申候。就夫稲葉美濃守（正則）殿被仰候ハ、御当家記録御仕立被成可然候。（中略）彼記録（御当家紀年録）先年松平式部大輔（榊原忠次）殿御仕立候由及聞候。（中略）式部殿別而被掛御目ヲ候私儀ニ候へは、殊に彼書物式部殿堅ク御秘事被成、何方へも御見せ不被成、御手前に有之段（中略）若御尋之時分、公儀へ可被指上哉、又は何とそ御請可被申上哉、各為心得申聞候。（中略）六左衛門江戸より罷帰候刻申越候ニ付而、大中老再三相談仕候処ニ（中略）長山（忠次）様御一代御越度無御座所ニ、彼御書物公儀へ指上、露頭之上、万一相違之儀も御座候歟、又ハ善惡之取沙汰ニも御座候而ハ、御為以外不宜御事と何も相談仕候。（下略）

こうしてもし幕府から尋ねられた時は焼失した旨答えることとし、同書は国許へ取寄せて、大中老が固く封印して秘蔵することとし、稀に家老が封印を改めたのみで今日に至っている⁷⁾。

この「添巻物」にはすでに榊原忠次自身がこれを厳秘したように記してあるが、忠次自撰の奥書末尾に「非敢誇之世人而使後世児孫得知之也」と記してあるところからみると、誇示はしない迄も、これを秘蔵する意志はなかったと考える。現に内閣文庫には寛文年間筆写とみられる「御当家紀年録」がある⁸⁾。恐らく寛文10年これを秘蔵する至る迄の間に写されたものであろう。つまり寛文4年から10年迄の間に幕府内に情勢の変化が生じ、榊原家が幕府の対大名政策に危惧の念をいだくに至った結果が、「御当家紀年録」の厳秘となったと認めるべきである。

この期間は酒井忠清の大老就任、そして一連の支配強化政策の施行された時期である。池田光政の建白について述べたように、社会の変動への幕府の対応策が諸大名への圧迫と受取られたことが、榊原藩の態度からも読取れるのである。しかも榊原氏は酒井にも匹敵する譜代の門閥である。榊原忠次はその累代の由緒の故に、寛文3年2月には保科正之と同列の大老に任ぜられている⁹⁾。その榊原氏がこのように幕府当局に強い畏怖の念をいだくに至ったということは、「下馬將軍」酒井忠清の立場が単に門閥譜代の権威に依拠するにとどまらず、そこに異質の要素が加って来ていることを想わしめる。

このように「下馬將軍」政治の内容を、幕府上層部の一点に権力が集中し、政治の方向が領主支配の弛緩に乗じてこれを圧迫するという形でとらえると、これは忠清時代に続く5代將軍綱吉の「天和の治¹⁰⁾」の前駆的現象と理解することも不可能ではない。しかし社会の変質に対応して政治を新しい方向に展開させるには、忠清の立場にかなり制約が認められるのである。

その制約を一言にしていえば、固定化した格式のもたらすものであった。忠清自身その家格の権威に依拠して大老の地位についた。武家諸法度をはじめ種々の法令や將軍の面命等によって、その機能発揮を強く求めら

れた「奉行所」を構成する諸役人、すなわち町奉行・勘定奉行あるいは大目付・目付等の撰任も、その家格・昇進順路が固定化してきた。例えば勘定奉行についてみると、寛文以前の奉行7人の前歴は一定せず、その中には関東勘定奉行(曾根吉次¹¹⁾)・郡代(岡田善政¹²⁾)・代官(伊丹康勝、但小姓兼任¹³⁾)と3人も財政・民政関係の職を経験した者があり、また將軍側近と兼帯の者(松平正綱¹⁴⁾・伊丹康勝)あるいは小姓から登用の者(伊丹勝長¹⁵⁾)もあり、奉行の撰任には個々の手腕を考慮した跡が認められる。またその石高も、2万2千石の松平正綱から1700石の村越吉勝¹⁶⁾までさまざまである。

ところが寛文2(1662)年任命の妻木重直¹⁷⁾以降は、昇進順路にひとつの型ができた。すなわち勘定奉行への路は、まず小姓組か書院番、稀に大番・小十人の番士となった者が、使番か徒頭を経て目付となり、ついで遠国奉行に出て、数年後江戸にもどって普請奉行か作事奉行になり、それから勘定奉行に昇る。その後町奉行・大目付・留守居へと昇進してゆく者もあった。石高も1000石から3000石の家が多い。代官や勘定方など財務経験者からの昇進がなくなり、中級の旗本の家に生れた者が、このような経路を大過なく通ってたどり着くのが勘定奉行の職ということになったのである¹⁸⁾。

町奉行については、初期にあっては使番から直ちに就任という型が続き、寛永8年(1631)の堀直之¹⁹⁾以降番士出身の奉行があらわれているが、慶安4年(1651)の石谷貞清²⁰⁾以降、勘定奉行とほぼ同様、番士→徒頭・使番→目付を経て昇進する順路が整って来ている。(町奉行の場合、目付から直ちに昇進する者が少なくない。)家禄も寛永15年の神尾元勝²¹⁾以後は1000石から3000石の者がほとんどであって、それ以前が9500石乃至5000石であるのと対蹠的である。

使番・目付・大目付という監察機関も、上述のように中級の旗本が番士

に任ぜられて後、一定の順路を昇進してゆく一段階となっている。その番士については万治2年(1659)6月番入規則が設けられ、とくに書院番・小姓組の両番士となるには、親兄弟の現職・前職等の筋目によることが明文化された²²⁾。

代官については、近山安高・細田時徳・宮崎道次・多羅尾光好など父祖代々続いた代官処罰もあった。また延宝6—7年(1678—79)の検地に際し、幕府は代官を検地担当者とせず、最寄りの大名にこれを命じた事実²³⁾について、在地と関係深い代官と農民とのなれあいによる不正防止を目的とするもので、これによって代官は近世初期以来の機能を喪い、単なる徴税吏の地位に陥るという解釈も出ている²⁴⁾。さらに寛文6年(1666)4月の代官への訓令²⁵⁾において、支配地の町人・百姓への貸付け²⁶⁾(第4条)、代官仲間や勘定衆との間の新規の縁組・養子²⁷⁾(第7条)を禁じている。

このように多少は代官に対する改革も実施しているが、他方代官の世襲は「実紀」にもしばしば記載され、ほとんど原則となっていたように見受けられる²⁸⁾。寛文9年には前に改易に処せられた代官小川正久を復職せしめている²⁹⁾。これは將軍家綱生母17回忌法会の恩赦によるものであるが、改易せられたものが、家禄のみならず職務まで父祖以来の職に復せしめられたところに、家格・家業の観念の強さが窺い知られよう。

経済界や社会状態など政治を取囲む環境が新しい局面を呈してきている時、幕政もそれに対応するひとつの方向を大老酒井忠清のもとに指向しながら、そのために大いにその機能を発揮すべき「奉行所」すなわち行政機構の構成が、かえって家格・家業の枠によって固定化していったのが、いわゆる「下馬將軍」時代の幕府政治の顕著な特色であったといえよう。

格式の制約は今後もしばしば幕政につきまとう問題であるが、ともかく「下馬將軍」酒井忠清の罷免を手はじめに、賞罰厳明の励行によって、行政機構の固定化を上下にわたって破っていったところに、幕政刷新の大き

な画期としての5代将軍綱吉の「天和の治」の意味が認められるのである。

註

- 1 伊東多三郎『日本近世史』Ⅱ（昭和27年）には、所謂執権政治に近い形態とある。私も『日本歴史講座』Ⅳ（昭和31年）で、一種の執権政治と解釈した。藤野保は『幕藩体制史の研究』（昭和36年）でこれを批判し、幕府権力の体制的確立に基く、老中政治の変質形態として把握すべしと説いている。これに対し私は執権政治の意味を敷衍して、忠清の独裁政治ではなく、将軍が元老・門閥層にのせられている存在となった中で、譜代の最高の門閥という家格上の権威により、老中合議制の主導権を忠清がにぎったと述べた。（『享保改革の研究』第2章3，昭和38年）北島正元『江戸幕府の権力構造』（昭和39年）では、譜代勢力による幕政の独占が大老・老中等による御用部屋政治として展開し、忠清の専権はその極限の形態を示すものと解釈している。
- 2 重修譜巻59。
- 3 「実紀」巻5には「今より後、国家の大事には酒井讃岐守忠勝と同じく連署すべしと命ぜらる。」とあり、「重修譜」巻59には「禁中および異国の事、その余政事の要務にをいてはこれをうけたまはり、連署加判の上首たるべきむね台命をかうぶる。」とある。つまり単に老中の首位についたにとどまらず、月番による日常政務は、はじめから免除されていたのであろう。
- 4 実紀巻31。
- 5 同 巻32，重修譜巻59。
- 6 史学雑誌8—9 所載「池田光政酒井忠清へ建白せし書」、『池田光政公伝』第55章にこれを全文転載し、標題の下に（寛文8年）と記してあるが、根拠不明。
- 7 榊原政春氏所蔵文書。
- 8 国立公文書館「内閣文庫所蔵大名の著述展示目録」（昭和53年5月）参照。
なおこの目録に「他に伝本の知られるものが無い」とあるのは、榊原家蔵の原本が寛文10年秘蔵に移されたまま今日に至ったからであろう。
- 9 殿中日記，実紀巻25，千年の松巻3。

- 10 拙稿『『天和の治』について』（史学雑誌69—11）,『享保改革の研究』第2章3—6参照。

なお「御仕置裁許帳」8（近世法制史料叢書1）に次のような事件が記載されている。

寛文11年5月11日 小石川餌指町地借藤兵衛出居衆作助、方々にて犬を盗み殺すにより、薩摩へ流罪。（668号）

同 15日 右藤兵衛召使三右衛門、浅草田原町にて犬2匹理不尽に刺殺すにより、薩摩へ流罪。（669号）

同 16日 右同断にて、小石川金杉村加左衛門出居衆戸右衛門等3人、薩摩へ流罪。（669号）

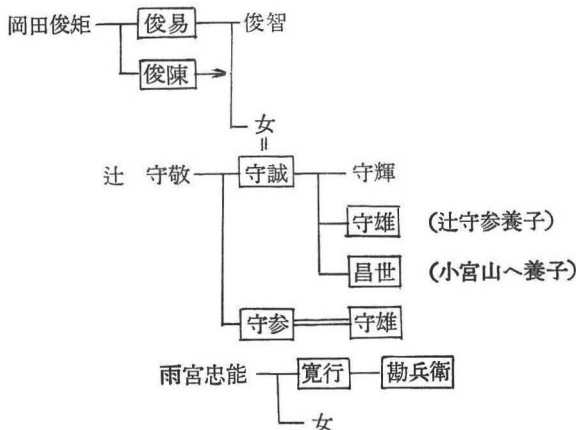
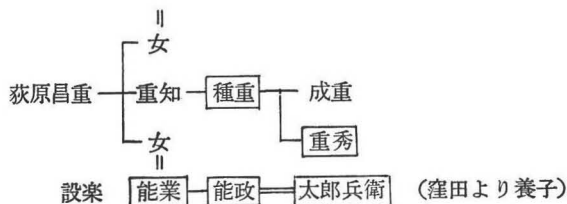
寛文13年5月2日 餌指町地借藤兵衛、犬殺しを訴えられ、忤権四郎と共に、佐渡へ流罪。（670号）

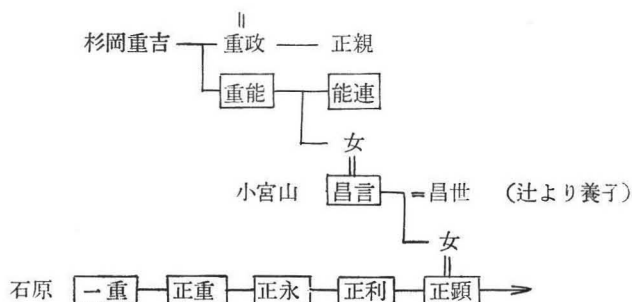
同 7日 小石川帛雲寺門前店借権兵衛、方々にて犬を殺すにより、3里近辺追放。（671号）

これらの事件の中、はじめの4件は恐らく同一事件であり、出居衆やその置主・召使等、いわばかぶき者に類する者の無頼な行動が処罰の対象になったとも考えられるが、犬を殺したことにより流罪または追放の刑に処せられたという点を取上げると、5代將軍綱吉の特異な性格から発したといわれている「生類憐みの令」が、すでに寛文年中にその前駆が認められることになる。あるいは「生類憐みの令」は綱吉によって極端に増幅されたとはいえ、その前提条件は寛文年中にあったと考えるべきかもしれない。

- 11 重修譜巻167。 12 同 巻326。 13 同 巻276。
14 同 巻255。 15 同 巻276。
16 同 巻1020。 17 同 巻301。
18 拙稿「享保改革に於ける主体勢力について」（史学雑誌63—3）,『享保改革の研究』第2章5,第5章2。
19 重修譜巻768。 20 同 巻891。 21 同 巻1044。
22 「実紀」巻17 万治2年6月25日条によると次の通りである。

大番頭の子、父兄弟書院番の者、父小姓組の跡、遠国役人の子、目付・使番の





28 「実紀」にあらわれる代官世襲は次の如くである。

寛文元年4月 近江芦浦観音寺住職交替，代官職も後住が世襲（巻21）。

同 6年4月 延沢代官松平親正老衰により，長男親茂世襲。二男正親も召出され，代官となる。（巻32，重修譜巻41）

同 11年2月 代官の子，父の家をつぎ原職を奉ずる者4人（巻42）。

延宝3年12月 松平親安，父親茂の遺跡をつぎ代官を勤む（重修譜巻41）。

同 5年9月 代官の子，父致仕して原職を命ぜられる者1人（巻55）。

同 年閏12月 代官の子原職をつぐ者1人（巻55）。

同 6年8月 代官の子父の原職を命ぜられる者3人（巻57）。

また天和一享保間に多数の代官が処罰，職を奪われたが，その中で近世初頭からの代官と判明する家が29家に達する。その氏名と「重修譜」の巻数を次に示す。
なお拙稿「天和の治について」，『享保改革の研究』第2章5，第6章1参照。

（天和一宝永年間）

伊奈忠利（933），彦坂平九郎（327），岡上次郎兵衛（1125）

藤林惟真（1175），小泉次太夫（391・936），設楽佐太郎（1136）

平野藤次郎（990），井狩十助（1125），豊島正勝（542）

伊奈忠易（933），壺井次右衛門（1253），熊沢良泰（1125）

宮崎重堯（1053），高室昌貞（225），小野貞頼（596）

八木権平（669），井出正基（1001），吉川源藏（断家譜11）

（享保年間）

平岡資親（280），諸星同政（1199），成瀬市郎右衛門（950）

平野重賢（990），長谷川長昌（866），樋口左兵衛（345）
鈴木政弘（1161），市川新右衛門（225），窪田貞房（223）
近山安敬（182），上林久豊（1256）

このほか処分によるものではないが，末吉嘉干（990）・宮崎泰之（1051）・秋鹿朝就（965）・松平親安（41）・曾根広定（1432）・近山正次（182）・芦浦観音寺（実紀巻21）など，天和以降になって父祖以来の代官職を転ぜられた家も少ない。これらの事例から推しても，寛文—延宝期の代官のいかに多くが，その職を世襲していたかが考えられる。

29 実紀 巻38，重修譜巻864。